



074622-001-1

特67-988

薩摩琵琶歌

西田 金起/作曲

M41

CEJ-0083



自序

凡そ音樂學に於ては、その性質、精神のあり所を究め、然してその歌詞に従ひて、悲哀なり、個所は、悲、哀、壯、快、の曲節に抑揚を附し、聽者をして恰もその境にあるが如く感ぜしめざるべからず。これ琵琶、箏、第一の要義なり。故に吟、せんとせば、まづ精神の沈静を計り、熱心に毫毛も怠らざる所なり。新曲の符號を以て、樂譜を附し、脚、か心ある士の爲めに編製せしものにて、如上の精神を以て、曲節に對し、新曲節を生かして奏すべし。節を致し、人は、あれ、これと、精神を致し、人は、勢、これ節に對し、の、木、拍、尼、精神を、及、非、た、れ、け、なり、大方、諸、子、幸、に、一、本、を、座、右、に、備、へ、て、この、注意、を、忘、れ、ず、業、務、の、餘、暇、一、曲、を、奏、して、浩然、乃、氣、を、養、ひ、給、ふ。

註節注意

音の大小高低等、大長短の符號を以て示せり。大干とあるは、最高音を標するものにして、假に倍者の大干を十と定むれば、其の八の音聲を以て、致し、可とす。如何とせれば、淫者か、自身の最高音を志く、致せば、身二に、致し、可とす。音聲に困難を来すのみならず、第一に、聲に、餘裕なく、聽者に於て、難者、きものなり。中干とは、初め地音に出で、中、六、七の、初音、上げ、亦、地に、落すものなり。地音とは、三若くは、五位の音にして、致の曲節により、異者、とす。山、明、れ、と、ある、は、勇、壯、活、発、の、音、を、以て、示す。吟、聲、は、概して、悲、哀、なる、場合、に、は、その、心地、を、以て、演、聲、等、を、用、ふる、を、可とす。段、落、切、り、は、符號の、示す、通り、に、聲、を、引、き、廻、し、終、る、を、地、に、落、す。

明治四十一年文月下浣

編者識

吹雪の敵

カ、山、を、抜、き、氣、を、盡、ふ、は、我、が、北、門、の、鎖、め、なる。

歩、兵、五、五、の、聯、隊、な、り、巴、と、降、り、さ、る。

雪、を、馬、前、の、塵、を、ぬ、く、拂、ひ、つ、進、む、二、百、余、騎、の、

治、世、余、の、五、十、歳、の、初、月、末、の、末、雪、に、鐘、を、た、た、る、霜、柱、

男、れ、ひ、づ、め、に、ひ、き、さ、る、向、は、は、づ、づ、の、雪、の、城、田、代、を

明治 41 8 1 内交

うもあつてく高緯り出ひ雲の軍、
幾重と比が取り

園み、
指窓の合かびつりにけり猛虎にあくれぬ将卒

も遂におすろ火きく、
とよぬ書本のめれ果て、雲の

霧の管に夜をさか、
かり寝の夢の法び兼ぬ、明け

行く空は白く、
積れたる雲にとがうられつ、中

あの本の森も長を森も内、
とまけどさる物に倒

北へて追ひ着か、
急念やのうはくのもあじ茲に日は暮れぬ、夜き出見

ねだちあはれた、
のぶかたまら、夫の如く、髪は千筋にうらつ眼を

雲をぬきて散りく、
兵あり

國のあめ雲を散ひ倒れてぬ

動け、
陸奥州空

地、
弓矢ハ幡神かけせ、
身を限りの武運を比、
守らせ冷く我は

ユシヤ
ミンカ
ケウ
カギ
ブ
ウ
マ
モ
タ
マ
コ

五

